

広島県の昔話の現状

—その語り口を中心に—

村岡克彦

一、はじめに

昔話は「語る」ものであるが、本県ではこういう言い方は殆んど聞かない。「ひとつ昔話ゆう語りましようか(芸北町)」「ひとつ語つてみゅうか(西城町)」と出だしの部分に入れたのを耳にしただけである。しかも、この人たちがすべて昔話の語り手であるとは言えない。この地であつて「語られていた」ことを示す痕跡にすぎない。

こういう状況の中で、近年各大学で本県の一定地域を集中的に調査採集され、報告をしておられる。また、地元では、一九七八年来、中国放送は「ひろしまの民話」を毎週一回、昔話の語り手を中心に数多く発掘登場させておられる。今回の発表には、個人の微細な資料を補なうために、多く「ひろしまの民話」既放送分を活用させていただいた。

二、語り口の特徴

1、発端部

「むかしあるところに」が一般的で、出だしは「むかし……」とする形が定着している。稀例ではあるが、「とんと昔があったげな(豊栄町)」「なにも昔があったげな(芸北町)」「なんと

昔が……(西城町・豊松村)」なども聞けた。

2、結語

。「もうし昔けつちりこ。昔やあむかつとう、今膝皿こちやあ痛い(芸北町)」などの「けつちりこ」の類。
。「むかしこつぷりどじょうのめ(庄原市)」などの「こつぷり」の類。

。「ほうれとんとひと昔(東野町)」などの「とんとひと昔」の類。
。その他、「せんこうまっこうひと昔(大和町)」「つっぽうかつぼうはあないた(話した)(豊栄町)」「それも十年ひと昔猿の尻はちいんがり(因島市)」など。

以上、抽出してみると一見多彩であるが、これらの結語をすべての語り手がきちんと持っているわけでもなければ、すべての話に定着しているでもない。全く結語を聞いたこともないという地域もある。これらの結語のどれかが残っている地域は、案外昔話が聞けるのである。

なお、これらの分布傾向は、「けつちりこ」類が安芸に多く、「こつぷり」類が備後に多いという漠たる目安はつくが、それ以外にははっきりした分布状況も、伝播経路も今の私にはつかめない。

3、各文(センテンス)の結び方

。「げな」「げないのう」「げなよのう」の類。「くと」「けう」

「ちゅう」「ゆうて」の類をそれぞれ一話の中に統一的な型として持っているもの。

。一話の中に「げな」類、「ゆう」類、「そうな」類を混同しているもの。

。一定の型を持たないもの。

以上は、語られた結果を話者ごとに敢えて分類したものである。

『安芸国昔話集』（一九三四年刊）、『昔話の研究』（一九三九年刊）などの古い資料においても、「げな」と「と」が古い形として考えられている。今、「と」を用いて話す人は芸北町に一人だけで、「げな」のみの人も四、五人である。大方の人は「げな」「そうな」「ちゅう」「ゆう」などを混用しているし、「げな」を全く使わない人も多い。私は、「そうな」「ゆう」「ちゅう」類が主流であると考えたい。もっとも、本当の孫や子供たちに語る場合であれば、また違った結果が出ると思う。

話の中に「げな」は全く使っていないが、「げなげな話でございませす。とんとひと昔」と結び、更に「これも昔話での」と断わって「小僧の戒め」を語ったり（木江町）、「狐に化された話」を突在の人物をあげて話した後、「これは話じゃあな、ほんまじゃけえ」と念を抽したり（高宮町）する例は多い。

ここでは、昔話は「げな話」「話」、即ち、作り話、ばかげた話と受けとめられている、と考えたい。とすると、他人に語るに面映ゆい感情がはたらいで「げな」が後退したのではなからうか。元來、昔話の保存状態が悪く、存在感も薄い本県である。最早日常的には子供に語られることのない昔話を、「旅人」である私たちに語るものであるから、なおのことその感を深くするのではなからうか。

三、内容的な特徴

佐伯町では、「岩国のおさん狐」は、語り手の母親が子供の頃、魚の行商に化けて家を訪れたりしたという話から入って、岩国城の城兵に殺されそれ以後はおさんは出ない、という明らかな矛盾を巧みに語る。また、口和町では、「化物問答」「化物退治」「猿業師」の舞台も登場人物も町内のものである。

これらの語り手は男性で、個々の持つ話術のうまさもあるが、巧みな「実話化」「伝説化」がうかがえる。それが語り手個人の持ち味なのか、語り継がれたものなのかは明らかでないが、「げな話」を避けたいとする心理がここにはたらいていると私は考えたい。昔話の語り手が少ない土地でも伝説などは容易に聞ける。昔話よりは伝説、いわれに価値を置く傾向が、特にその土地の「知識人」に多いのも、このことを裏つけてはいはしまいか。

四、まとめ

以上、本県では、昔話の語りにおける格式もなくなり、語りの型も崩れかけている実態がある。しかし、このことはかえって昔話に「自由」を与えてくれているのではなからうか。この自由さと内容に真実味を持たせたいとする語り手の心理とが相互にはたらき合っている。その結果として、昔話の語りは確実に減り、昔話そのものも変質しつつある、というのが、私の考える本県の昔話の現状なのである。

五、おわりに

今、昔話の語りの場であったユルイはなく、老人たちに昔話をね

だつてくれるはずの孫たちも側には居ない。居たとしても彼らは祖父父母よりもテレビを選ぶ。こういう話を老人たちから聞くことは、昔話を聴かせてもらえないことよりも寂しい。老人たちが、自分を育ててくれた昔話を現代には最早無価値であると判断した場合、早晚それは消滅するであらう。「民話ブーム」の今、生きた昔話が失われて行くという皮肉な現象がある。

反面、こうした社会変化に敏感に反応（本県にはこの傾向が強いと思う）して、昔話も、たとえば世間話、笑話などに変質して生きつづけるのではないか。その面ではより変化に敏感な男性の語り手話し上手は貴重な存在となるのではないか。私はそれを期待しているのである。

なお、この発表後の質疑の中で多くの方々からご教示をいただいた。

。全国的な視野を通して、話型、伝播経路、昔話の役割りなど、本県の地域的特徴を明らかにできないか。

。県内の地域的特徴はどうなっているのか。たとえば安芸と備後、県北と県南での違いなどは明らかにならないか。

。昔話が特定個人の家にのみ語られているような例は、本県にはないか。

。話者が説得力を持った話し方をするために、世間話化したり、子供には注釈を加えたりするのは、何も本県だけの特徴とは言えないのではないか。

。本県では、その家の主人が来客に簡単に横座を譲るという特徴が見られる。それと昔話の伝承傾向とは関連しないか。などであった。

これらは、今の私には思いつきすら述べられないものが多い。今後の私の貴重なテーマとすることで、多くの方々から寄せられたご示唆に対する深謝としたい。

（むらおか かつひこ・広島国泰寺高校）

● 日本口承文藝學會は、会則にも謳つてありますように、日本および諸外国の口承文藝に関連するものの調査、資料収集、研究を促進し、研究者間の交流をはかることを目的に設立されました。つきましては、この目的を達成するために、各県各市町村の口承文藝に関する調査報告、資料等を學會にご寄贈ください。会員諸氏のご協力をお願い致します。

● 会員の方々の口承文藝に関する原稿を募集いたしております。研究論文は四百字詰原稿用紙三十枚前後、資料報告は三十枚以内で日本口承文藝學會機関誌編集委員会宛にお送り下さい。なお、掲載等につきましては編集委員会にご一任下さい。